

古今和歌集
後編
六衛胡蝶物語後編

三

~ 13
3658
8



13
3658
8

夢想兵衛胡蝶物語後編卷之三

東都

曲亭馬琴戲編



哀傷郷

哀傷ハ徳の害あり。そ成りて。関雎ハ哀を傷らば。よハ人々既ニ情
の入り多し情あり。又哀傷あり。とゆへ。むし。杞梁が妻。泣く。哭く。
塚崩。城陥り。處女が哭声。天小通。雷電下。怒り。といふ。事あり。と
至誠の抵。とところ。申包胥。七日哭。秦王終。楚を救。烏賊。津使主
由七日哭。衣通姫。誘引。ぬ現。や。哭。り。の。も。時。不。當。て。一。藝。の。中。多。れ
バ。功。も。あ。ら。う。の。雍。門。子。が。哭。上。手。又。楠。公。の。踊。哭。夫。今。不。至。て。稱。せ。ら
る。ま。は。嗚。子。と。持。統。天。皇。勝。ぬ。り。の。と。歌。骨。牌。の。負。援。ら。る。も。笑。ふ
べ。く。泣。て。娛。り。た。夜。の。ま。は。笑。ふ。と。強。顔。と。高。尾。が。い。ら。ん。と。い。ふ。

五月廿二日、新後編卷之三

涙はそと笑ひぢゆく油酌のろろぬが浮世樂を盡く哀も来り哀去て
 飲び来り飲ぶのを飲べば哀れと云ふやせは只飲むと哀まじと静
 天理よまじくふりの神仙とも老佛とも馬鹿とも利根ともいつるん
 ともく哀傷といふ國の人をみあはひまじく哀れ死めて生平
 とよまじく五月雨の簷下癩病患の樋口とらうくと泪流して暮らぬ
 目もあはれればは良るを義人と稱し愁眉を上品と定め疴眠を愛に
 かり。壓口かくと娼ぐらも赤子の啼声を寝く命の長い短いとあひや
 幼少より子どもらも愁眉古くて哭こととの習はよから夜類も膝より
 袖が雨に絞るもあぬ血涙は手掛と出さう入さう出さう入さういそげさ
 朝の板敷炎天小頼の汗を拭ぶ如く些立あつて女中あんと板原上田の鼻紙
 も拭ふ涙で毎日十帖あつる費とあり隣の女兒が哭愁眉古くても

あの子の声はよくと惜しとあはんとて評ととる寒三十日の
 哭復ひ十九土用の砂糖湯も皆よく哭声立てふが為かじと國の
 りの飲とつとを怪むりのはるけとと。羨む兵傷の紙老鴉の花はよ
 まじくあつるも亦る國へ菓とくえつ。えつ又つけさく又つけ直と呆
 りのたつる。同のあも誇る人も人さへ見ま目水とらねおひつれば心地は
 ころと哭やと止所とあはねば一言まの同答もるらびと何もあつ
 かのとく年中哭て暮らるとあつ凡との國俗の性として事と觸
 ころよつて物もあひるさてもあつ。やづとる春の門松と眞土の菘の
 一里塚と見え哀らがり。四方山よとら八重霞に定めるは秋の雲と雲
 易ささあひや。嗟も採らぬ毎樹の花もを平散とたのまを老と親と夏
 ちへの改遣火の茶毘の煙と世を果敢と山の狭外。秋の月終のなま

西を願ひ冬終る庭の雪へ人の命の消易さよあひこも會者定難と
惜りてハ初よ春来る乙鳥も居るむ程ハ可きほど秋の別まが悲し
とく。門と向上よりのもひ。哀別離苦と惜りてハ天飛バ秋の初雁も。
後と先とら世のあひびづる強よ入るやと。づまう春ふ扱とらと。
あひささよ涙の種彼れの嫁入りは此の婿どろ。ヤレめでとのとりの
る。新婦が姑ふるるるの夏の同松の翠の墨髪も尾花が末の白髪と
え。玉と敷く容顔も。法帝のまふるるに速。それの齡よ之くうと共白
髪のうちあればあひ諦る。ともあつるん老女不定ハ世のあひハ亭主が經
命でも内義が天折るされても。づま一方缺ねるあひ。ひえりとのあひ
うと。そのとれの氣の妻。今もやあひの長いと婚姻の真最中。哭て媒
妁。哭女郎。舅姑。内兄才とら。親族縁者長屋中。大約そのゆとら

るりの大声あがて哭ぬハ。かくて夫婦睦々。あひは原心ひ。岩
田等と共よ忽地氣と結び産ハ生死の境と。十月が間哭ゆ。又
哭幕してやうやふ婉くる赤子の産声。オギヤアくと泣うけ。亭
主も紙又酸鼻も生ゆるりの死ハ必定この子の命ハ長いのち。經いと
やらあねども。速れ速れ死ねばるる生きた紙んく死ぬ。をわん
か。まど哀しみのあひ。壓さ波ハ産婦も共よ。啜咽あが。血暈
發。上と下と。うせども。穩婆ハ。今夜の謝礼の金百疋と。
握りつめて居るとこ。あひ。老の命。今が欲さの血塗と
扱も。死まが物も。置土産何その命。別やとら。さうでも。貸ハ失ひ
易。さまが遣入る。今も。今も。あひ。失人の哀。さ
を。あひ。取らる。とあけて。胸の中。涙も。尊て。役も。さ。が。れ。バ



あまのこ

あまのこ

あまのこ

うごたるま

とろろ

うごたるま



うごたるま



あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

人の奴婢のいんども。見えの目くらましの涙雨を先へ降し。托女夜
 護の初対面から。後朝の涙を涙に人三度の膳よむくハ。噎て頭
 死のまやせまの飲食傷のまやせまの飲と着を取らう胸をさう。些
 小の筒あつりの春鋤て夏植つけ。秋くら冬に收る米の一粒もつとも
 化るんや。農夫の身の膏で肥し他と大菩薩今むさくことか咽入ると
 ぞハ物体るも。哀しうござると。喰ととらうのほせせ。彩宅ひら
 ち被衣をぬめあ客中亭主も眉うち髭舞ゆこの年外らうかけてやう
 や。普請の成就たれど。造らやとてあつらふ。祝融舞馬の難
 あん。忽地鳥有とらうぬ。うらうらうと百年と。蠹朽る家ハあ
 び。況て衣影の思ふ交よ。汗とめも。先影も。非如家を住荒さ。衣
 衣新雜具の持つと。聖も。志まぬハ命の家庫が先へ減る。欽亭主

の命が先へ場。欽とて。もかくても。の世ハ假宅造化の借屋今さらうよ。
 うと。その目と。おひま。ま。奈何哀う。あま。うら。る。程。是の道理。至極く
 結構る。家造りも。不如意。よる。ま。他人の。有。又。その人。由。一生。涯。便む
 正。ま。何。ぬ。正。から。阿。房。の。餘。煙。中。只。三。月。崗。岳。鋤。ま。田。園。と。る。果。ハ
 浅。茅。が。草。芥。と。虫。の。青。む。ら。や。残。る。らん。虫。の。青。む。ら。や。残。る。らん。と。鼻
 ふ。つ。り。し。小。強。を。殺。ま。の。く。愁。ひ。声。馳。走。の。酒。中。咽。喉。へ。入。ら。ば。あ。る。り。よ
 常。を。観。ど。る。ゆ。急。一。宿。の。起。り。も。水。盃。で。遺。言。し。あ。る。日。中。で。あ。ぬ。ま
 ぬ。め。の。と。お。ひ。定。め。て。妻。も。子。も。影。膳。居。む。泣。く。は。年。弱。ど。ら。の。色。情。も。
 め。ふ。と。ら。れ。の。ま。め。と。哀。も。子。と。も。閉。浄。も。生。死。と。お。ひ。か。ら。ぬ。死。ら。う
 哭。中。又。富。め。の。富。ま。ふ。子。孫。相。続。の。後。も。財。の。場。る。ん。と。を。哀。し。も。
 負。し。死。め。の。負。し。死。ま。よ。あ。ぬ。不。義。理。の。生。死。ぬ。先。も。や。死。し。い。と。ま

哀れど人の迷ふ物と拾へど迷せし人の胸守る。幸あんかち
あらんとて他は痛を病氣小病を涙を涙でぬれどる。これバ貴玉も賤玉
も。賢玉も不肖玉も。老弱男女おるべて常を記せぬりのあけま
バ物争ひをさるゝさるゝ。國は盜賊もえては只同病と相憐む実情を
りて交まバ。あるもあらぬも。死したも。疎るもさるゝて憑りく。世思も稀
る。國のれど惜しむさあ喜しむも。腹のころとともあは。良賤喪
居るりの如く。歌曲と歌のいど。絃管鳴らす。水柱山よあるりのわく。
明くも暮るも。佛三昧口を放す。笑みりの終る一人もあはざれば。物さ
裏ふちらる。人氣和せど。病身るぬりのあけま。動もされバ諸
勞咳を引取て。あつらら。運命る。夢想兵討へ。直下の形勢を
えふ。苦く。いふべうもあは。惜るも浮世情ぬも。浮世の人の憂を忘れ

て。あつらら。由さる。喜ぶ。怒る。歩む。あつらら。かく
ちで。老を。若く。て。運命る。あつらら。説諭。あつらら。度。あつらら。人
あつらら。移。あつらら。の。晴。あつらら。あつらら。止。あつらら。人。あつらら。と。素。あつらら。も。彼。あつらら。首。あつらら。隅。あつらら。
あつらら。と。哭。あつらら。首。あつらら。隅。あつらら。滅。あつらら。噓。あつらら。と。哭。あつらら。と。あつらら。逆。あつらら。上。あつらら。せ。あつらら。ら。あつらら。う。
あつらら。も。賺。あつらら。ふ。あつらら。も。あつらら。う。あつらら。つ。あつらら。鳴。あつらら。の。あつらら。顔。あつらら。を。あつらら。蜂。あつらら。の。あつらら。薫。あつらら。る。あつらら。如。あつらら。く。あつらら。る。あつらら。且。あつらら。バ。あつらら。れ。あつらら。も。あつらら。苦。あつらら。虫。
あつらら。泣。あつらら。漬。あつらら。く。あつらら。共。あつらら。よ。あつらら。哭。あつらら。や。あつらら。と。あつらら。持。あつらら。か。あつらら。る。あつらら。亦。あつらら。よ。あつらら。長。あつらら。居。あつらら。せ。あつらら。バ。あつらら。哭。あつらら。殺。あつらら。され。あつらら。も。あつらら。れ。あつらら。ば。あつらら。は。
あつらら。足。あつらら。の。あつらら。の。あつらら。ら。あつらら。尻。あつらら。は。あつらら。帆。あつらら。ひ。あつらら。て。あつらら。走。あつらら。る。あつらら。と。あつらら。涙。あつらら。川。あつらら。と。あつらら。ら。あつらら。渡。あつらら。り。あつらら。彼。あつらら。腸。あつらら。を。
あつらら。と。あつらら。田。あつらら。越。あつらら。し。あつらら。胸。あつらら。板。あつらら。の。あつらら。驛。あつらら。路。あつらら。を。あつらら。悲。あつらら。歎。あつらら。坂。あつらら。へ。あつらら。う。あつらら。か。あつらら。り。あつらら。苛。あつらら。南。あつらら。志。あつらら。山。あつらら。を。あつらら。慈。あつらら。日。あつらら。寺。
あつらら。不。あつらら。指。あつらら。て。あつらら。那。あつらら。珠。あつらら。の。あつらら。南。あつらら。弥。あつらら。陀。あつらら。を。あつらら。拜。あつらら。り。あつらら。綾。あつらら。の。あつらら。も。あつらら。ぬ。あつらら。袖。あつらら。が。あつらら。浦。あつらら。の。あつらら。浦。あつらら。の。あつらら。え。あつらら。る。あつらら。め。あつらら。も。
あつらら。酸。あつらら。鼻。あつらら。生。あつらら。湾。あつらら。鯨。あつらら。死。あつらら。湾。あつらら。鯨。あつらら。る。あつらら。と。あつらら。魚。あつらら。の。あつらら。渡。あつらら。ら。あつらら。揚。あつらら。ら。あつらら。ま。あつらら。ら。あつらら。る。あつらら。も。あつらら。の。あつらら。ま。あつらら。は。
あつらら。あつらら。物。あつらら。毎。あつらら。よ。あつらら。氣。あつらら。由。あつらら。滅。あつらら。入。あつらら。ま。あつらら。バ。あつらら。只。あつらら。直。あつらら。ま。あつらら。ら。あつらら。も。あつらら。ま。あつらら。ら。あつらら。く。あつらら。悲。あつらら。野。

とよ郊原みぞせりる。この外墓所とせり。古墳草不埋ま。
 白揚高く風靡靡。有馬皇子が磐白松。今由猛ま。のれと送し。
 真間の手児名の墳墓へ。紅淡楓を條のむ。位牌は似し。霸王樹
 多く。棺槨とるる。りりり。の檜の木口。凄しく。巴峽は叫ぶ。猿の聲。堂
 樹を祀と鹿の鳴。びび。のま。と葛の紫の。うら。ん。が。不。あ。る。尺。骨。抗。あ。よ
 り。あ。る。秋。の。時。を。初。よ。吻。く。冬。の。蜂。維。り。が。子。も。小。夜。千。鳥。冥。土。の。鳥。
 小。声。く。と。り。れ。ら。死。出。の。山。鴉。阿。曾。沼。の。鴛。鴦。も。哀。暮。の。死。よ。来。て。ぞ
 栖。む。楚。野。の。雉。夜。の。鶴。も。う。り。三。重。三。の。桐。落。葉。を。や。寂。滅。と。示。し。鳥。静
 三。匹。風。吹。く。朝。露。ま。ぶ。清。く。感。慨。ま。く。く。や。ら。ろ。と。鬼。小。さ。る。と。由。か。り。
 あ。の。道。と。化。み。へ。下。と。ま。り。流。石。の。後。悲。兵。衛。も。引。入。り。と。ま。り。ふ。お。お。え。て。
 ま。く。と。ま。り。と。も。足。進。ま。べ。り。の。ま。く。と。ま。り。只。顧。み。天。ら。ら。仰。ぎ。て。紙。老

待。バ。又。生。憎。よ。お。ろ。く。降。り。て。受。せ。て。は。ゆ。ら。草。葉。よ。聚。く。虫。の。声。
 い。づ。い。せ。れ。入。相。の。野。寺。の。撞。声。胸。小。蒼。て。只。難。息。と。る。お。ろ。ゆ。の。れ。一。業
 繁。ら。尾。花。か。袖。の。つ。れ。と。帯。振。く。と。ん。と。ま。り。と。ま。り。の。り。で。あ。る。め。く。薄。が
 下。小。を。返。ま。り。白。く。髭。う。る。融。融。あ。り。憐。れ。い。く。む。く。の。あ。小。を。な。ら。西。の。打。れ。て
 訪。れ。鳥。る。る。ぬ。り。や。誰。か。う。こ。を。あ。め。と。後。悲。兵。衛。へ。左。よ。右。よ。草。葉。と。ま。り。彼。空
 髑。髑。ふ。ら。對。ひ。汝。原。未。何。知。の。人。ぞ。才。子。義。人。の。る。る。果。飲。貪。夫。惡。婆。の
 る。ま。り。果。飲。生。と。貪。り。利。と。失。ひ。と。事。の。こ。ま。り。る。る。飲。王。候。武。將。の。國。家
 と。失。ひ。屍。と。戦。場。小。曝。ま。り。の。飲。善。約。り。て。不。孝。不。義。の。愧。と。妻。子
 小。送。せ。り。の。飲。世。よ。捨。り。且。と。餓。死。せ。り。の。飲。酒。よ。濁。且。と。頓。滅。せ。り。飲
 せ。よ。恙。ひ。て。情。死。せ。り。飲。春。秋。の。不。足。る。瘦。る。犬。を。肥。さん。と。て。死。し。
 の。野。よ。捐。さ。り。る。飲。こ。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。

かまづこも又何さういへん。まゝのまゝと屍風の敗るといへども骨の存
 び白骨今々の母靈あつてこそ説とて為とす。少少の國信の性にて。哀
 傷をりて生卒とよるから。悲歎裏小逼りて大折るりのかうべ。これ解
 迄の如く在歴とて且べ既よ利害と況喻とて惑ひを醒さんとせよ。啼哭
 の声巷小満て。こが言を聴りのほ。こまづとくさひ一とをいひて止まんも。腹
 のあつるゝあつるゝまづ。今こまづは又託とて示え。よく説とてと聴聞せよ。
 夫喜怒哀懼愛惡欲の七情の人の世の常ありて生とて静あるは天乃
 性感して動くは性の慈慈あるは七情渡る。いま怒れば憤る言言
 樂やで。ひとり哀むりのへあべいふへの人いへるよあり。哀死の死別あり。
 生別まよまよとのほ。物哀れぬも又慈る。かるもまよ。いさ悲めが
 陰と破る。うく飲べ。陽と破る。よくて死を喪ふりのへ悼めども生を滅

せと。喪は病あると死の肉と辞。せむとよとあり。喪と忌服肉を腥
 こまその生を保ん為る。世俗多く死の死する。生の生する所以とて
 婦人の仁と仁と。終る君子の仁とあべ。是を悲歎裏は迫
 る。こまとを洩すとす。まづ。紋経とてその死を求るりのあり。いと痛む
 迷ひよあべ。生死の昼夜は異なる。生人と死人と。こまそのうひる。
 死を憎めどもそのうひる。只生る日。生とて死する日。死とて生む
 べ。吾生まて五尺の形あり。已死とて一棺の土とある。これ生るとい
 と。いとも。物のまよとよあべ。死るといふと。いとも。土の厚みあべ。生る
 生とて土とある。亦何ぞ哀む。孝子の死を喪ふとて哭泣と声と惜ま
 ざるも。既よその喪除とて。愁眉披んと勢は著。こまを名づけ。礼節と
 いふ。むじ子夏が除喪の見糸。こまよ琴を予へ。持持とてこれよ身。

哀しむまじく志まざればも先王礼を製する。され敢てまじくとり
子張が除喪の見業み。まじく奉を予へば持標。まじく歌ひ先王
礼を制し。まじく敢至る。まじく子夏も子張も孔子の弟子也。
つと有る。賢人のまじくも。哀をりて礼を。まじく夫天はの哀を。齊
斬の情。饘粥の食。まじく礼を。哀を。又礼を。哀を。まじく捨る。まじく物毎は涙り。
く。哀を。まじく傷る。情を。まじく思癡を。彼狂人が物に對し。
終日哭と異なる。汝も。まじく聖人の時。因て位を安く。世も。當つて
その業を。樂む。まじく哀傷は。形の主也。神のまじく室る。形を
勞して。己が。まじく。精を用ひて。己が。まじく。場も。まじく。速る。只
哀れを。悲む。その情。まじく。悼む。命を。隕す。まじく。眼を。病の。まじく
空は。華を。見。天を。憂む。の。墮ん。と。懼る。と。發。喻。まじく。を。れ。

でも。の。驚。哀。まじく。の。恨。悼。まじく。愚。病。の。所。為。まじく。ひ
まじく。形。始。より。あり。の。不。又。始。より。あり。の。不。有。も
あ。まじく。も。あ。ぬ。まじく。名。け。人。間。の。陽。子。を。長。壽。と。彭。祖。を
夭。折。と。まじく。人の。壽命。の。限。り。あり。て。天地。の。限。り。あり。及。び。限。り
ある。命。を。り。て。限。り。の。まじく。一。年。三。百。六。十。日。周。ら。ち。鎮。め。ら。ち。歎。ま
まじく。ら。命。を。縮。め。の。愚。と。まじく。あ。り。の。病。の。まじく。と。まじく。小。人。利
と。失。へ。まじく。と。哀。と。士。人。の。名。の。為。まじく。と。哀。と。有。司。の。爵。禄。の。為。ま
まじく。の。歎。と。深。く。まじく。の。哀。を。究。る。と。死。の。身。を。り。て。まじく。殉。る。り
まじく。の。哀。傷。の。まじく。の。生。まじく。と。まじく。寡。慾。や。て。愛
情。まじく。の。愚。癡。の。哀。傷。の。まじく。の。世。倍。の。室。と。まじく。只。彼。雀。の
子。也。まじく。の。龍。の。腮。の。珠。も。まじく。の。貨。を。貴。び。て。の。室。を。失。の。まじく。

古事類聚卷之三

あはれ
哀傷郷の
ふる野の
野の
ふる
ふる
ふる
ふる



古事類聚卷之三

古事類聚卷之三

九

列子天
瑞篇曰
易變而
為一
變而為
七七變
而為九
九變也
乃復變
而為一
云云

又憐へらさるるべし。人おのく穉きとたへつまで壯のて成るべし。中壯
年よるぶとくも。いま老後のる成ありんば。さぬなよ世ゆやう。賢
も五十年。不有るも五十年。一生涯とてまをす。ふその子の生る
とて。と千との死ん時を哀も。春の木杪の花とて。ちりるん後とて。ひかり。
東山より出る月とて。西へ入る。終の友とて。初めとて。親を喜ぶべしと喜ぶべし。
悟るふ似る迷ひあり。慈母けしとて。等用ふべし。これ一と生と二と
と生と。三より万物とて。まは天地と父母と。これと一あり。萬物とて。兄弟
あり。己が身へ天地と共ふ生とて。己その一と。ふまよとて。その一と。といふと
一と。と言と二とあるあり。又その言といふと。三とあるべし。といふと。か
と。一と。一と。一と。生とて。兄弟あり。妻子あり。子孫あり。親族あり。主君あり。
朋友あり。喜怒哀あり。哀樂ありとたへ。一と。二と。三と。萬物と生ぶるとまをす。

のこられ一と。ふまよとて。一と。終るの天理あり。豈凡夫私の胸算用りて
一生の動定と合し。諸人の生るハ骨の如し。人の死するハ夜の如し。夜とて
睡ぬ人由り。熟く睡む。我とて。まよ。物を多。天の一元よ
改も多。さるがら死人ふ異る。ねと精神い。滅せぬ。初ハ陽向の時
必覚る。とて。めて。己が身。あつ。成る。これの。と。成る。まよ。喜怒哀樂と。悦
ま。て。夜死して。昏生る。人の生死ハ昏夜ふあり。覚ると。死。由。睡。む。と。て。我。と
忘る。と。て。慈る。と。て。天地と壽命を。齊一せん。情慾の。や。か。る。と。て。生
の。室。と。ま。ひ。滅。し。魂。生。く。か。ら。ぬ。と。死。人。を。く。た。め。て。死。せ。り。と。て。これ。ハ。人
の。死。と。て。長。夜。の。睡。と。と。て。い。屍。と。土。中。小。埋。る。夜。臺。ふ。入。る。と。由。り
と。て。一。と。の。理。を。悟。る。め。の。の。喜。し。も。あ。ら。う。と。て。哀。も。由。り。汝。觸。體。由
其。あ。ら。う。と。て。説。と。を。と。て。遠。忘。せ。て。物。を。死。し。ま。よ。入。り。て。の。國。信。よ。告。す。と。て。

といひ捨て亦ゆく復ふ日へそ暮く友らよ。うらぬりの月づの阿るは
 ちうよ路を求めく。まふ未の雲ふ裳襦らし十町あまうまつ。まれば
 ありる松の下ふ。二八むりりある羨少年の長ずる袴の袂と草草の
 雲ふ引く。あま玉の如光する袴の折同正しく積るりる。まふ兵衛を
 えく。小腰と折め先生まづ。憇ひの。今示され。教訓の道死イ
 稱つと。あまゆふはま。回答せんとて結まづ。といひうけて莞然と。ら
 笑顔蕩開て。まづの風あけ奇。と羨兵衛へ。とてんうの。這奴と
 融騷のむけさるるらん。とぞと騒ぐ。まふ。徐まふ。まふ。少年つ
 る。議論ある。かのがひつると。小懐あふ。まら。まは。ゆ。といへバ
 ふ。び莞尔と。うら笑とか。人迹絶る。野まふ。を。渡ら。つ。使ひ。
 ち。宿へ遠く。ゆ。づ。脚が。は。虫の青の外ふ。り。た。八重葎の夜

へ殊ら。家けく。も。月と燭。か。う。明。さ。め。誘。り。と。ま。先。よ。ま。ま。羨。兵
 衛。の。ま。ま。と。ま。ま。後。方。か。跟。と。ま。ゆ。と。ま。ま。ま。教。百。歩。ふ。至。び。忽。地
 へ。黄。ま。ま。ま。ま。深。は。し。る。林。原。の。中。か。生。垣。締。繞。ら。し。る。柴。の。戸。の。り。り。丸
 木。の。柱。茅。の。檐。僅。か。席。六。枚。む。り。と。布。設。く。調。度。と。納。る。袋。戸。と。ひ。り。り。の
 の。外。か。又。物。あり。とも。え。え。ど。風。爐。の。炭。と。饒。て。形。の。ま。ま。金。と。う。け。物。の。本
 二三。巻。引。ら。し。し。る。ほ。ろ。り。木。椿。ひ。と。う。あり。て。反。古。裂。て。ま。ま。う。け。し。る
 が。油。ふ。黄。ま。ま。加。羅。の。香。ま。ま。少年。ま。づ。裡。へ。入。り。て。こ。の。ま。ま。と。ま。入。り。ふ
 羨。兵。衛。へ。河。原。へ。使。う。け。の。り。て。仙。家。の。宿。且。る。ま。ま。お。持。し。つ。賓。主。の。坐
 定。り。て。も。る。舟。物。と。び。り。で。薄。茶。う。ま。ま。て。ま。ま。主。風。流。の。生。憎。ま。ま。月
 へ。草。ふ。り。生。く。教。窓。か。ま。入。り。虫。へ。庭。へ。聚。ま。ま。声。賓。を。慰。め。り。且
 と。少年。の。ま。ま。嚮。け。先生。の。高。論。と。ま。ま。ま。ま。懐。慨。ま。ま。堪。ま。ま。惜。の

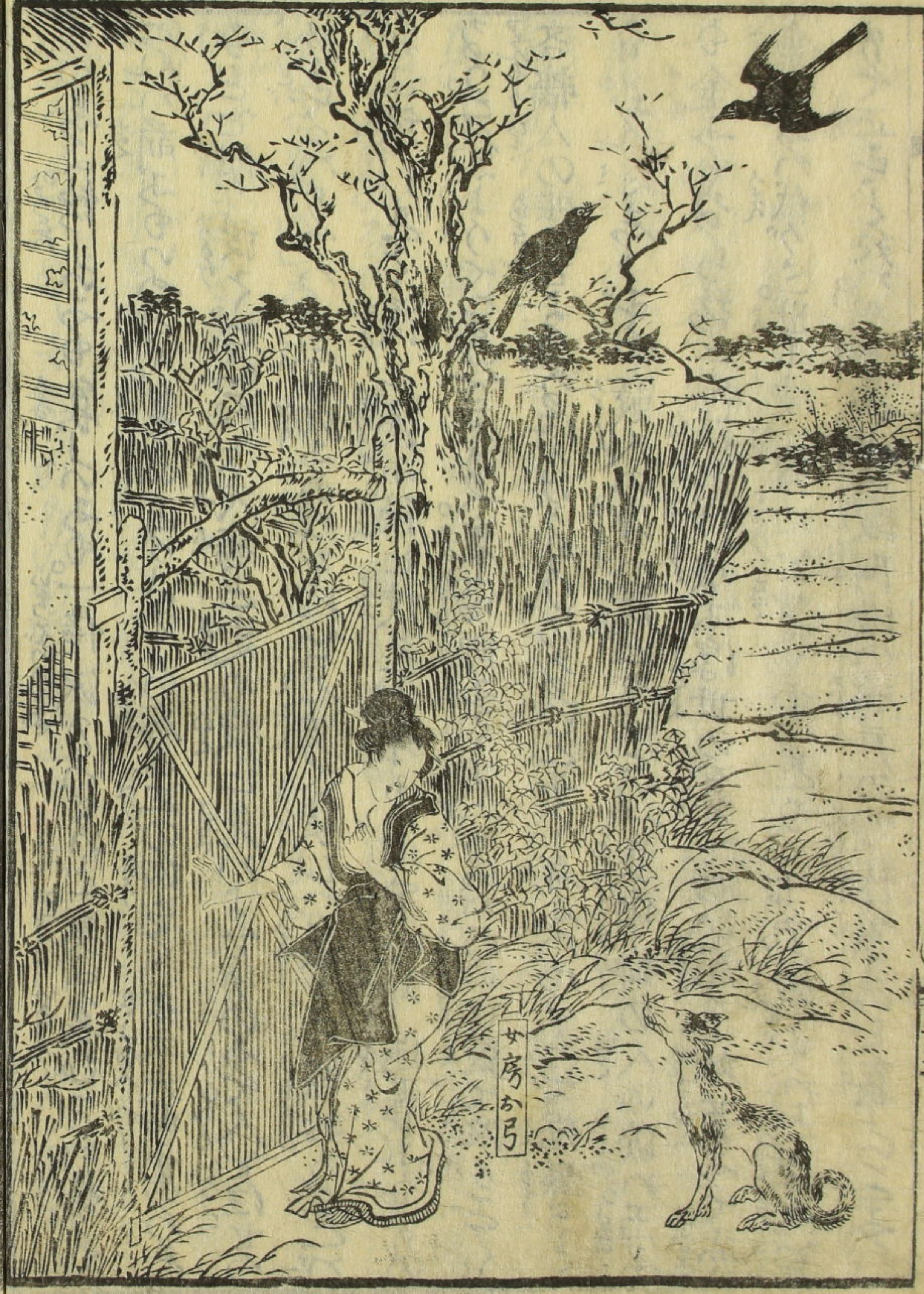
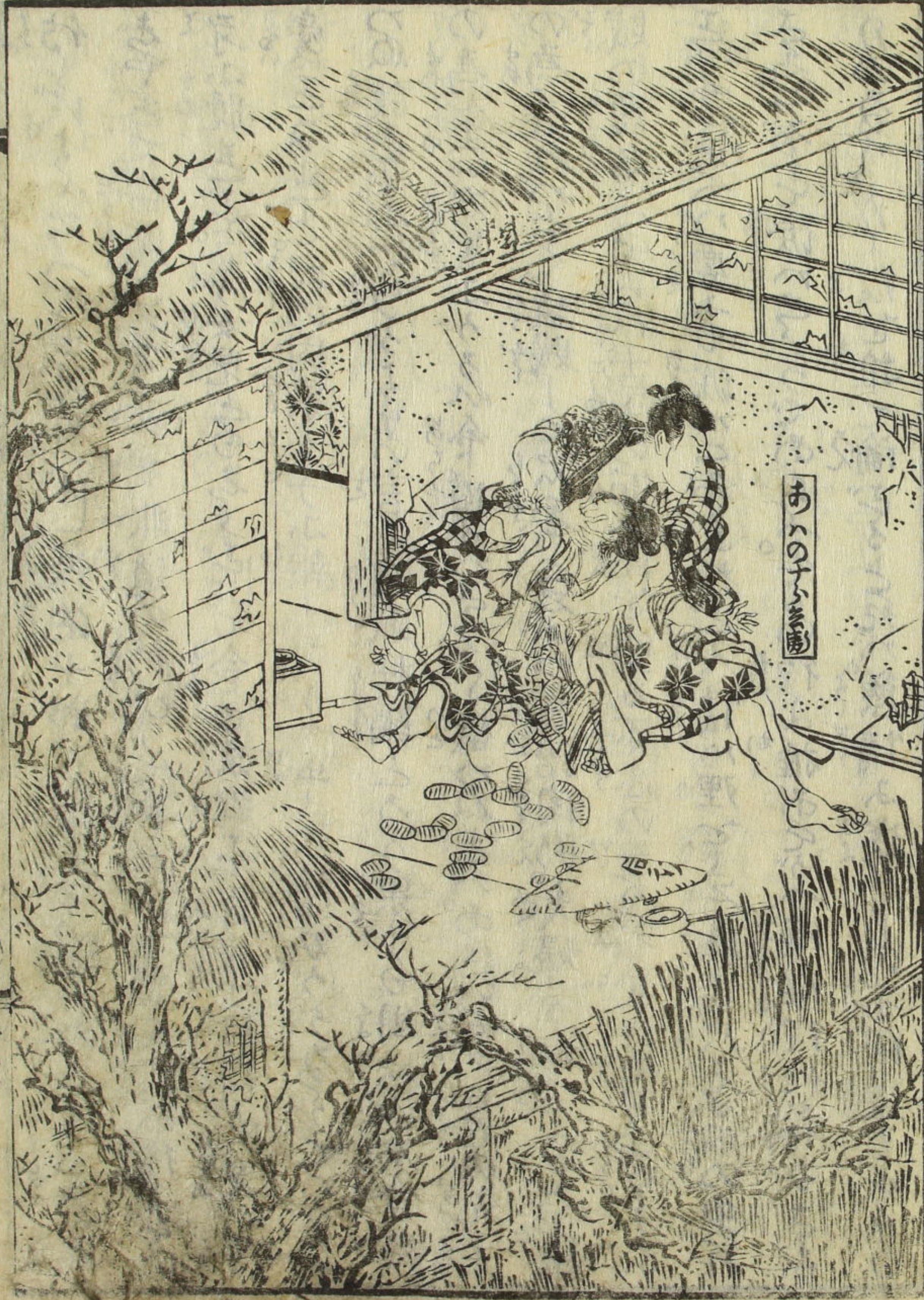
遺目... 新... 家...

うる先夫の死生の変と説くも死生の異なるをきつらむらひは道家の訓と并
 いふも礼節の固圜と蹴り出らむらひは其示さるる下も
 生る人の上ありて死くへ更ふその上は夫死するものへ上は主君あり下は臣
 僕あり。貧富貴賤の別あり。長女老弱の序あり。四時をきりて晝夜を
 きりて喜怒哀樂の情慾をけむらむらひは天子ありて
 下は彼より死と樂むりの真の樂よむらひは哀死と哀むりのも亦真
 の哀よむらひに至仁の親あり。至悲の傍は昔聖王の制度せしむらひは
 礼せりて首とて下りて人より情と釐て天然不固らば夏る海冷るれども
 その節きまりとて衣と更秋る海暑けむらひは其節きまりとて衣と
 襲ふ不居の哀も。日子果しとてさらふめぬ笑顔とつらむらひは世よ
 さらむらひ。酒よ宴の樂死も。法則を乱さむらひは。意もあむらひは虚辭とて。

不盛とてはははは天子の親も。うちきりて夫婦の睦も。よりそへて。礼節
 の桎梏も繁き。仁義の戦鬼とるものへ人間のまかりて。死されむらひは
 何責む。きりては又今とて。何とて回答せむらひは。いかにいふもこれ
 ども。いかにとては確う亦このうとて。いかにとて。いかにとて。愁不假も。形
 とあむらひは。いかにとて。先生へ。いかにとて。死後の樂とて。いかにとて。國の風俗と
 ありむらひは。いかにとて。感むらひは。死と笑へむらひは。これを笑へむらひは。いかにとて。南
 荒の阪あり人。を食入國あり。西天の中あり。教生せむらひは。國あり。北狄の
 物のありとて。きりて。東海へ。君子も。富り。況て日本の武烈支那の討王の人
 と屠く。樂せり。いかにとて。衛靈公の移を車も。樂せ。龍湖院の鳴る。いかにとて。賢者へ
 位と授けむらひは。いかにとて。例きむらひは。いかにとて。いかにとて。いかにとて。賢者へ
 境ふ入ると。大禁を問とて。いかにとて。いかにとて。いかにとて。いかにとて。

とさるもの。お中びざとさるはくば友のあたるは代國の人のこととさる。
 只哭つてとさるめどその哭中お樂きあり。喻ては文藩人の生平ふ
 悲言いふかど。長しむらうて哭もはくば物も感して哭へ人情物多
 ぬそ哭へ情慈多しとを嬉がる。この國のこも限らんや。或は乞者ん
 どの途に病卧て今臨終とぞ。或は水没或は絞経在死のみの道次
 お仆らとらに蝶のごく聚ひ蠅の如く嬉る。こを認るの路まりあむ。
 まうれも真実ふこれを憐しく菜とよ。臨終の正念とよめんとさるの
 へさく。観るのまさく。多くと。いふ死さるのふ益は。差夫迷へるうま。
 逝者へ水の如く。貴賤老幼ごくの浦へ。何日何時のこれ死は没んや。ま
 ぬ浮世あつるがら。代の枉死は驚く。真実憐むる。人々の目の得
 とさるもろく。かくまふ戯れくも。鬼とて。死物への國は経とけらむ。

これらへ人の哀と身の楽。まふまふあはれ。又かくまふはくばととも。
 癡情へとて哀死とを樂とさるな。そよ大夫曲のあはれ。少少も
 ゆるぎと胸苦しく。鼻涙うらうとて嬉る。物の本のあはれ。孝
 子節婦のうを仰りて。理の迫られ。條下あへ。何ろりと泣ぬりの中。
 その哀とを飲ぶ。なまのほる。本への見科。どの哀とをさる。哀む
 へ。これ哀とあるは。彼が哀も。誘ふ。感と情の動くの。人の
 天地の陶器と。假人の形とをせ。陶器は原素声へるけ。泣く。泣く。泣く。
 玲瓏とる。人の性も又。静る。か天性の。物も叩きて。情慈
 の音を發し。喜びも。怒りも。哀も。すれ。樂も。よれ。人の性よ
 七情の。茶碗。小音の。如く。それを。可るらんや。又あはれ。と
 可るらんや。金石陶器は。声ると。可るらんや。又あはれ。と。可るらんや。



付らばよく入ても入るべし彼飽十郎兵衛と云ふ人のが忠義の爲
 ぢやとて盗賊と云ふ。非義非道の終ひて合のて天罰の後よその
 身小脱と云ふ。日か女見とも云ふ。して合の多教と自業自得女見の可
 愛と云ふ。と親の因果か子小報ふ身も出する清刀がうらうてのり
 のぬ諺と云ふ。あもあも言ふ盗賊杜騙と云ふ。果も。國次の刀食浅
 の爲重いな義ふらる令捨るはさうく厭のぬと云ふ。あまの女の鼻の先主
 の爲るれびと云。盗賊して衣衣と云ふ。言語同助夫婦がむつり。盗
 賊の悪名と云ふ。古主の面へ泥を塗る。不忠の至り。不義の至り。苦しい
 下下と云ふ。ば虚も涙のらねねど人情の理と云ふ。後と云ふ。只る所のわれ
 さふらむと涙のららであらふと云ふ。行よ推あてが浄瑠璃他者も云
 りのる。り。理を推て論ぶると云ふ。態情も迷ふりの不図盗と云ふ。

あらふか。衣衣小凝する丈夫が。うつまるなると云ふ。二ふりけそ。
 あらふとて盗かつらふや。又婆とどの由婆とどの。十五のる。やるぬ孫女見
 小親の在所を索称よとて大枚の金をとりて。獨行と云ふ。石を抱う
 せ。瀏小臨す。薪を負して火小あされと教する小異る。べり。和歌あ
 殺さす。と云ふ。胡麻の蠅小ふたつけれる。助りがる命る。彼婆と
 かのま。このころと十郎兵衛か悪行よ。多ひ比。ま。女見が枉死也。昔と
 小と云ふ。一幕。涙と云ふ。及ぶ。亦彼加孫重氏入道。刈草紙へ。り。載
 不簡名告あて。も。大。る。名。告。を。物。を。石。堂。丸。は。後。せ。と。人。
 又見物も袖紋と云ふ。その。の。の。質。屋。庫。と。の。草。紙。へ。り。載
 とい。彼。戯。と。は。の。の。愛。と。鬼。と。哭。が。と。実。情。あ。の。ぬ
 じ。この。除。名。と。三。の。切。由。大。と。推。て。去。り。ぬ。道。程。と。稱。ひ。理。義。不。の。ま。

ありしる脚きといふの。その教多し。つらみの。よ。あれごとく世倍り。
 耳の遠くて解が。あつび三つび尋思く。やうその理よたどりつ。
 ちめて感さる。そのあつび。目前を才とさる。艶曲歌舞の迂遠くて。何小
 あつび。そのあつび。呼と感とて泣の。そのあつび。改きん。
 世の人情の。されば親を喪ふて泣く。そのあつび。年を。年を。
 情慾の忙し。たれ。白徒もある。生涯親を慕ふ。の。
 道と稱して孝子といふ。至孝の孝あり。誠忠の忠あり。孝の孝とて孝を
 つし忠の。忠とて孝より。道と名づけて聖といふ。がれば強て孝の。
 孝年より。親より。小窮屈を強て忠とて。子と。妻を
 賣りの。名聞の。至孝誠忠といふ。況て盜賊杜
 騙して忠義といふ。論も及ぶ。彼沙石集小載。法師が母の為。小禁

雨 又 姫 又 雨 又 姫 又 雨 又 姫
 の 子 封 人 也

断所めて漁せといふ。似て非なる孝の。孟宗王祥が。殿計
 へ入る。孝の。勉て。の。ね。只。の。意。悖。
 牙の宝といふ。の。外。亦。と。誠。を。人。釋。孝。の。の。と
 の。又。孝。を。真。の。孝。の。推
 と死へ。怒。後。の。怒。ぬ。威。勢。の。酷。哭
 の。涙。流。して。悲。あ。草。紙。物。語。の。悲。の。と。
 書ぬ。餘情。これ。素夫の。泣。上。戸。弥。生。女。目。の。出。り。西。三。瀟。海。ら
 せぬ。奴。婢。の。死。則。離。別。の。情。や。梅。若。の。淚。雨。布。が。泪。の。雨。又。如。ど。し。じ
 唐山。雨。姫。といふ。美人。あり。その。晋。國。へ。と。死。の。淚。襟。を。作。く。ら。ら
 死。べ。く。悲。が。遂。に。晋。王。不。及。て。寵。せ。れ。王。と。筵。林。を。共。み。く。食。ふ。山
 海。の。珍。味。と。つ。富。貴。の。牙。の。あ。ま。り。く。の。哭。う。後。悔。せ。る。これ。を

雍門子八 高誘云 雍門子 名固善 彈琴又 善哭雍 門齊西 門也居 近之因 以為氏 哭猶歎 也見猶 臧也孟 嘗君齊 相田文 茅坤云 雍門之 哭與泰 青之謳 相似 劉慎 劉孝標

白來書 曰劉慎 云云性 粗率為 世祖所 押侮 羊志 來書曰 醫術人

日本の曲子小鞠して。洗子出ると死涙で生る。今ハ洗子の風も否といと
ゆきしく咽ふ。のち後の泣び小。たのめは長ととせり。と死ハその長もハ
長もふあふ。のち後の長もふあふ。の泣びを忘る。と死ハその泣びも泣
あふ。かれば泣びの長も。只そのと死ハ隨ふりのみ。生涯の泣
とつて生涯の長ととせり。の。びくわの死の。是も亦唐山ハ雍門
子といふの。よ。哭とてり。その名高。被くその哭とてり。孟嘗君
小見せし。既して諱と陳ね。意と通下心を附。聲と度て歌哭ふれば。
孟嘗君これが為。不決とみ。流て禁め。せん。とて。精神
内小形。と。長とと外小喻と。不傳の道と。陳重と。彼三の切。と。ん
といふの。と。の術と。よ。これハ今ハ。奇。く。又宋世祖皇帝
殊小羅。愛。志。ひ。と。段貴妃と。の。美人の墓。小。と。せ。の。と。あ。つ。る。小。

世祖即秦郡の太守劉慎字ハ徳願といふの。不宣。や。卿等貴
妃が為。よ。哭。て。哀。と。骨。髓。不。徹。る。と。の。賞。せ。と。宣。ハ。劉。徳。願。と。け
の。つ。声。う。ま。き。踊。働。不。け。ま。流。く。涙。雨。の。如。し。上。や。と。誓。ひ。て。豫。州
の。刺。史。ふ。れ。と。る。と。又。その。次。ハ。志。と。い。の。不。哭。せ。め。ハ。不。也。若。と
ぬ。哭。上。手。と。鳴。咽。其。あ。の。直。ら。れ。ば。祿。下。され。ぬ。その。ら。あ。人。志。心
小。向。や。ハ。切。り。の。術。あ。り。て。急。不。決。を。流。し。の。ひ。と。ろ。ろ。え。と。と。顔。れ
ハ。羊。志。答。て。某。別。ハ。術。あ。る。ふ。あ。去。年。牙。さ。り。女。房。を。只。一。と。よ
る。ひ。物。と。と。こ。を。涙。を。流。し。と。と。の。も。る。げ。い。と。と。ぞ。ハ。我。ま。よ
似。れ。も。時。不。當。て。名。譽。と。る。れ。強。て。長。を。好。む。と。い。ふ。も。鹿。を
鞭。て。こ。を。鳴。せ。その。鳴。声。を。人。不。せ。と。決。と。を。せ。ん。と。思。ふ。か。と。死
拙。さ。技。で。人。泣。と。假。初。の。り。る。り。と。も。實。と。生。と。虚。と。ね。ハ。人。情

へんてんくび。もつたば羊志が貴妃小哭し人傷り不似れども。その快と
亡妻と云ふ減りゆくゆゑなり。俳優人の愁歎場也。上子の落ふ身を金して
我を忘るる哀むなふ。又見物也。泣きどし。且もその愁歎の眞の哀も
あるべし。とて。憶をよむる。亦あはんその哀とて飲ぶりの。世間りたぐの
孟嘗君又りたぐの世祖あつる人。さして先生睡らば。且も。國俗乃
哭すの。も。つら。ぬ。と。て。滅めり。情は疎さ感ひおけず。君彼揮子乃
啼声と。や。め。む。す。終日。嗥て。嗔。ども。嗔。ま。と。声。の。づ。ら。生。小。任。
て。存。怒。哀。樂。小。因。ふ。あ。ね。バ。泣。と。い。と。も。和。さ。あり。植。山。四。鳥。の。鳴。は。比。て。
淫婦か。つ。つ。の。哭。声。と。ま。り。あ。ひ。し。孔子の。い。ふ。く。と。ら。ね。ば。先生。あ。あ。と
ぶ。る。べ。し。ふ。が。國。俗。の。物。小。哭。と。揮。見。の。嗥。る。如。と。夢。さ。り。め。の。ぬ。い。の。ふ
ぞ。凡。哀。傷。郷。の。人。と。く。物。小。泣。り。る。く。初。べ。さ。席。も。も。哀。を。飲。ぶ。

孔子家語
植山四鳥云

へんてんくび。もつたば羊志が貴妃小哭し人傷り不似れども。その快と
亡妻と云ふ減りゆくゆゑなり。俳優人の愁歎場也。上子の落ふ身を金して
我を忘るる哀むなふ。又見物也。泣きどし。且もその愁歎の眞の哀も
あるべし。とて。憶をよむる。亦あはんその哀とて飲ぶりの。世間りたぐの
孟嘗君又りたぐの世祖あつる人。さして先生睡らば。且も。國俗乃
哭すの。も。つら。ぬ。と。て。滅めり。情は疎さ感ひおけず。君彼揮子乃
啼声と。や。め。む。す。終日。嗥て。嗔。ども。嗔。ま。と。声。の。づ。ら。生。小。任。
て。存。怒。哀。樂。小。因。ふ。あ。ね。バ。泣。と。い。と。も。和。さ。あり。植。山。四。鳥。の。鳴。は。比。て。
淫婦か。つ。つ。の。哭。声。と。ま。り。あ。ひ。し。孔子の。い。ふ。く。と。ら。ね。ば。先生。あ。あ。と
ぶ。る。べ。し。ふ。が。國。俗。の。物。小。哭。と。揮。見。の。嗥。る。如。と。夢。さ。り。め。の。ぬ。い。の。ふ
ぞ。凡。哀。傷。郷。の。人。と。く。物。小。泣。り。る。く。初。べ。さ。席。も。も。哀。を。飲。ぶ。
へんてんくび。もつたば羊志が貴妃小哭し人傷り不似れども。その快と
亡妻と云ふ減りゆくゆゑなり。俳優人の愁歎場也。上子の落ふ身を金して
我を忘るる哀むなふ。又見物也。泣きどし。且もその愁歎の眞の哀も
あるべし。とて。憶をよむる。亦あはんその哀とて飲ぶりの。世間りたぐの
孟嘗君又りたぐの世祖あつる人。さして先生睡らば。且も。國俗乃
哭すの。も。つら。ぬ。と。て。滅めり。情は疎さ感ひおけず。君彼揮子乃
啼声と。や。め。む。す。終日。嗥て。嗔。ども。嗔。ま。と。声。の。づ。ら。生。小。任。
て。存。怒。哀。樂。小。因。ふ。あ。ね。バ。泣。と。い。と。も。和。さ。あり。植。山。四。鳥。の。鳴。は。比。て。
淫婦か。つ。つ。の。哭。声。と。ま。り。あ。ひ。し。孔子の。い。ふ。く。と。ら。ね。ば。先生。あ。あ。と
ぶ。る。べ。し。ふ。が。國。俗。の。物。小。哭。と。揮。見。の。嗥。る。如。と。夢。さ。り。め。の。ぬ。い。の。ふ
ぞ。凡。哀。傷。郷。の。人。と。く。物。小。泣。り。る。く。初。べ。さ。席。も。も。哀。を。飲。ぶ。
悪るの。疾。む。ま。ん。争。ひ。せ。り。利。と。さ。ひ。む。怒。は。感。へ。ど。あ。る。は。化。國。人。の。情。態。
と。然。ふ。く。と。う。ふ。争。ひ。せ。り。天。と。恨。む。人。と。咎。め。つ。た。ぐ。の。罪。と。造。ま。と。
物。と。憐。む。む。と。怒。と。う。せ。ハ。あ。さ。も。さ。勝。手。の。大。懲。言。息。ひ。さ。
さ。ら。で。終。つ。惜。む。と。と。い。の。う。は。引。あ。つ。ま。ば。哀。傷。郷。の。人。と。く。物。と。憐。む。む。
さ。ら。バ。勸。善。懲。惡。の。為。小。物。の。本。と。憐。む。の。理。を。不。仗。り。因果。を。説。き。物。
の。あ。つ。き。と。喩。せ。む。こ。と。ま。ら。ぬ。の。の。は。す。也。その。本。然。の。言。を。あ。つ。し。
ことと。見。て。入。り。口。か。態。と。此。の。恥。る。の。の。も。あ。ら。ぬ。ま。つ。ら。バ。勸。善。懲。惡。の。
捷徑。と。い。め。の。の。哀。傷。郷。の。人。と。く。物。と。憐。む。む。先生。有。終。説。め。り。と。い。ま。さ。有。
善。徳。を。脱。し。む。治。く。乱。る。疾。病。を。治。む。安。く。して。危。さ。と。
志。を。た。げ。危。く。は。樂。を。苦。と。志。を。た。げ。苦。ま。は。飲。く。と。哀。さ。と。

忘るれば哀まじかるなよ有用とあるのぞ用ふあり。あつたよ人の就
しるりの解。さうとあつとどもの。その子と息とをえくかひせば吐血中
喘とどして頓滅せんといふたれよ。おどろた悲まて周章を又一家の主
たるりの常不食とぞ状えん。妻子の息を飲ぶと病とれよ食され
べ。碗とぞとてと息と飲ぶ。病覆て菜と末め。哀と末とてとめて哭さ
飢て後よ食を倍。渴て後よ大不飲と。熱て後よ水と投寒て後よ火と
とふまば苦む亦除さうく。うの身へ死してその益あり。こと所謂有用の
中の用あり。抑亦遅くもばや。とく執行志ありと現つけられて憂愁
兵衛の席も堪むと忙しく。柴の戸を逃出て足不信して二三町走り退
つてくまばあつつる室へ忽地うせく。天と母のぐと明るまふ。悔さび
と回く。さんかうえまば浅まや。そのめ憇ひく尾花か下の融體の母と

アふついのわら。これらと怪むおもあま紙老時まづふ降り来
つ。津舟ととろろれく。そのま乗まば閃くと升て虚空へ入る。

○總評

魚と網をおそれどく人をおそれ人の息を哀まづて物を哀
む。網の心あるのめらるる。故小魚と息をおそれど。物の已と益とを
なよ人こそを哀む。以あるる。魚の息とる紙まて。金中よ拵び
人の命のえらるるを。おのいで六慾の街に拵ぶ。物を哀む。おの息
をかみしひよあつた。已を哀む。哀とを忘るる。ふまづべり。物
を哀む。とさの何國も。是哀傷。御あるる。り。已を哀む。と死
ハ誰う。是哀想。兵衛あるる。り。よく哀とを忘る。のハ喜怒も
る。好憎は。既よ喜怒る。好憎る。け。且ハ哀傷と名る。國は。

哀傷あはれといふ國くにのけしむは後世兵衛由あるとほほ。解とするの馬ま轆轆
 くの墮おちるふ。えてその痛いたをおろえむ。その疼いた痛いたをささぐるも多おほし。
 又その命いのちを隕おとふ至いたるは我われ醒さめてこの書あやを批ひ評ひやうと。解とするのえは
 ありまらば。かまはせむ。有心うしんよすまらむ。

夢想兵胡蝶物語後編卷之三 甲

